

鎌倉幕府の東国経営

——その仏教史的ー断面——

一 小稿の課題

自らの政權基盤を東国社会に求めることから始まった鎌倉幕府が、その施策を政治・経済は言うに及ばず、宗教面にも公的権力の担い手として施したであろうことは、いとも容易に推測される。言うなれば、幕府と東国社会との間には、それに個有な政治・経済・宗教における三位一体的な関係の歴史が存したに相違ないのである。小稿はそのなかで、幕府と東国社会との仏教史的な関わりを、少しく愚考するものである。

私は小稿に先立ち、不備ながらも、幕府の宗教政策の基調は、公家政權の天台宗を中核とした「顕密主義」⁽¹⁾に対して、独自の臨済禅および真言密教を核とする「禅密主義」に求めるべきであることを、鶴岡八幡宮別当職の補任状況や幕府と延暦寺山門派との関わり、あるいは幕府と園城寺寺門派との法交、幕閣の参禅のあり様などに徴して述べたことがある⁽²⁾。また、その幕府の宗教政策も実は、幕府史の「將軍專制政治」↓「北条執權政治」↓「得宗專制政治」に適應しつつ、「禅密主義の生成期」↓「禅密主義の成立期」↓「禅密主義の展開・終末期」というように、三階梯を辿ったであろうことも指摘したことがある⁽³⁾。

佐々木 馨

その意味では、小稿は基本的にはそうした視角のなかの連続した基礎的作業に他ならない。幕府と東国社会とのより直接的・具体的な仏教史的関わりは、前の三階梯に従うなら、第二―第三階梯の「禅密主義の成立・展開・終末期」に求められる。言葉をかえていえば、「禅密主義」の生成のスタートを切った幕府が東国社会との仏教史的関係を持ち始めるのは、北条義時の世に補任された。「蝦夷管領」たる津軽安東氏の頃である。そして、その最も濃密な関係を両者が切り結ぶのは、「廻国伝説」に象徴される北条時頼の時である。この時頼廻国伝承が、幕府の「禅密主義」の成立・展開と密接不可分に関わっているだろうことは推測に難くない。

従って、逆からいえば、東国社会における幕政前期は、血なまぐさい源義経・平泉藤原氏一族の追討に象徴される奥州という地に対して、幕閣が鎮魂の心操を向け、ある種、神秘なる念を抱懷していたと思われる。その意味で、この期は東国社会が幕府と直接的な仏教史的交渉を未だ持たず、古代的世界の延長上の時期であったといえよう。そこには、天台宗を中心にしたというよりは、天台宗一色に彩られた古代東国的な仏教世界が展開していたと思われる⁽⁴⁾。

では、このように幕府前期の時期には、天台宗的世界の支配的であった東国社会が、その中後期において、幕府との関わりの中で、その仏教史的営みをどのようにくり抜いていたのであろうか。これこそが、小稿の目指す課題に他ならない。

が、幾重にも重畳する歴史断層の中から、中世的断面をとり出して、それを寸分も変わらず復原することは、かなり難しい。加えて、当該分野の史料は、後人の手になる編纂物であることが多く、その分だけ、どうしてもその史料的价值が低下することも否めない。それゆえ、勢い、東国社会自身が多く語らない部分については、幕府の側の宗教世界から逆照射するしか残された道はない。小稿もその都度、この基本的視角によりながら行論することになる。

幾多の史料制約と限界を承知しながらも、小稿は、第一に『津軽一統志』の描き伝える古代と中世の宗教の実相を少しく探り、第二には中世東国社会の仏教史的事実を、当該地域の「自治体史」がどのように叙述して今日に伝えているかを伺い、可能な限り、その叙述を通して中世的仏教世界の原風景に迫ってみたい。そして、最後に、鎌倉幕府の宗教政策が反映されたと思われる『住心院文書』⁵⁾について言及し、もって幕府の仏教史的な東国経営のありよう、あるいは東国社会の中世仏教史的世界を垣間見ることにはしたい。

二 『津軽一統志』に見る宗教世界

ここでは『津軽一統志』を素材にして、古代・中世の北奥地域における宗教の実相を探ることを直接の課題とするのであるが、古代と中世期の特徴を逆に浮き彫りにするためにも、近世期を一括した統計整理を、『津軽一統志』首巻の「神社 仏閣」の項目に施して、図表化して示せば、次の(A)および(B)表のようになる。

(A) 〽『津軽一統志』に見る神社〽

(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	
聖観音	勝軍地藏堂	大聖不動明王	八幡太神宮	岩木山三所大権現	寺 社 名
不詳	慶長六年 為信公	円智上人、阿 闍羅山を開基	不詳	延暦15年	創建年次(者)
久渡寺(真言宗)	橋雲寺(真言宗)	国上寺(真言宗)	最勝院(真言宗)	真言宗百沢寺	別当(宗派名)
僧円智の創立とも伝える		付近に田村麻呂 建立の森山毘沙 堂あり	この付近は 坂上田村麻呂の 陣所	坂上田村麻呂の 奉祭	備 考

(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)
外浜十二所権現	浪岡牛頭天王	今淵八幡太神宮	山王大権現	熊野本宮大権現	森山毘沙門堂	藤崎毘沙門天	横内妙見堂(青森)	加茂大明神 (浪岡)	八幡太神宮 (浪岡)	神明社	八幡太神宮	熊野三所大権現	深沙大権現	東照太神宮
同 右	同 右	同 上	同 右	大同二年 坂上田村麻呂	同 右	延暦十二年 坂上田村麻呂	延暦十一年 坂上田村麻呂	同 右	延暦十二年 坂上田村麻呂	為信公	不 詳	不 詳	大同二年 坂上田村麻呂	寛永元年 信牧公
							孫九郎	同 右	神 職	神 職	那智山袋宮寺 (天台宗)	飛竜山東福院 (天台宗)	猿賀山長命院 神宮寺(天台宗)	薬王院(天台宗)
									退転前の別当は 如意山妙宝院		同 右	元龜四年の建立 ともいう		

(31)	(30)	(29)	(28)	(27)	(26)	(25)	(24)	(23)	(22)	(21)
追良瀬如意輪観音	日照田薬師如来堂	乳井毘沙門堂	藤崎熊野大権現	赤石毘沙門堂	深浦薬師堂	深浦間口観音堂	桜庭地主八幡宮	桜庭千手観音堂	広船千手観音堂	田舎館大日如来堂
康永三年	同 右	承暦二年	未 詳 坂上田村麻呂	同 右	同 右	同 右	大同二年 坂上田村麻呂	未 詳	同 右	大同二年 坂上田村麻呂
藤原氏家		福王寺	修験 常福院	神職		修験 善光院		斎藤大和守	修験 広住院	修験 大蔵院
	本尊は行基菩薩 作と伝う	坂上田村麻呂の 創建で承暦二年 の再興とも伝う	城館二	「往古真言宗寺院 退転シテ今号「新 城館」	本尊は智証大師 作と伝う	本尊は聖徳太子 作と伝う		本尊は弘法大師 作と伝う 堂は田村麻呂の 建立とも伝う	本尊は恵心作と 伝う	

(45)	(44)	(43)	(42)	(41)	(40)	(39)	(38)	(37)	(36)	(35)	(34)	(33)	(32)
弁財天	サウゼン堂	新屋八幡太神宮	森沢山神	鯉ヶ沢白鳥大明神	和徳稻荷大明神	城内館神社	堀越熊野大権現宮	鯉ヶ沢八幡太神宮	十一面観音 沖館貴峯山	十腰内大石大明神	十腰内観世音	地主白山大権現	入内観世音堂
信義公 寛永十八年	信義公 寛永十五年	信牧公 寛永年中	信牧公 寛永五年	信牧公 寛永三年	未詳	信牧公 慶長十六年	未詳	北条時頼 未詳	文亀三年	同右	未詳	未詳	未詳
柿崎兵部太夫	弁之太夫								貴峯院 修験	同右	百沢寺(真言宗)	神職	
青森安湯	津軽坂村				元和年中、信牧 公の再興					同右	岩木山三所権現 を参考	同右	慶長年間の創立 と伝う

(59)	(58)	(57)	(56)	(55)	(54)	(53)	(52)	(51)	(50)	(49)	(48)	(47)	(46)
住吉大明神	春日大明神	石堂薬師	貴布弥大明神	稻荷大明神	竜田大明神	広瀬宮	稻荷大明神	五智如来堂	諏訪大明神	天満大自在天神	薬師寺	羽黒大権現	薬師如来
同右	信政公 宝永五年	津軽信知再興 慶長八年	不詳	信政公 宝永五年	同右	信政公 元禄十年	同右	信政公 寛文十年	信義公 不詳	信義公 正保二年	信義公 慶安五年	信義公 慶安四年	慶安三年 木戸道壺
		修験 教円寺		白孤寺(浄土宗)			神職 小野万太夫	普光寺(真言宗)	神職 佐々木近江守	修験 教円寺		神職 長利善太夫	修験 心応院
富田村	春日町	湯口村	野内竜ノ口	新寺町	田野沢	長浜	藤代村		宮地村	兼平山	大鰐村	大鰐村	八幡・熊野境内

(B) 〓「津輕一統志」に見る寺院〓

(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	
神宮寺	献平寺	高伯寺	普光寺	大円寺	久渡寺	橋雲寺	国上寺	最勝院	百沢寺	寺院名
同右	天台宗	同右	同右	真言宗別行派	同右	同右	同右	同右	真言宗	宗派名
		大円寺	大円寺							本寺
大同二年	寛永元年	世後白河院の治	寛文十年 信政公	不詳	不詳。僧円智の創立	慶長六年	不詳。僧円智の創立とも	天文元年 弘信僧都	不詳	創立年次
天正十五年に真言宗に改宗、元和期旧に復す。	弘前に在り 薬王院と号し	蔵館村に在り 東夷調伏のため		初め、大浦種里村にあり	真言五山寺 初め小沢村にあり	真言五山寺	真言五山寺	初め大浦種里村にあり。真言五山寺	真言五山寺 初め十腰内村にあり。	備考

(29)	(28)	(27)	(26)	(25)	(24)	(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)
宗禅寺	正法院	雲祥寺	正光寺	長円寺	月峰院	常光寺	寿晶院	龍淵寺	梅林寺	草秀寺	清安寺	海蔵寺	全晶寺	亨徳寺	長勝寺	報恩寺	袋宮寺	東福院
同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	曹洞宗	同右	同右	天台宗
同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	長勝寺	梅林寺	草秀寺	同右	同右	同右	同右	長勝寺	加賀宗徳寺	江戸輪王寺		
										慶長年中		明応年中			大永年中	明暦三年	天正年中	不詳
荒川村	蓮田町	金木村		飯詰村				板屋野木村			清安寺の末寺に、赤石村の松源庵、中野目の村庵あり				藤崎満蔵寺と合考すべし			頽廢後、袋宮寺として再興。

(51)	(50)	(49)	(48)	(47)	(46)	(45)	(44)	(43)	(42)	(41)	(40)	(39)	(38)	(37)	(36)	(35)	(34)	(33)	(32)	(31)	(30)
宝積院	隣松寺	高沢寺	松源寺	永泉寺	正伝寺	嶺松院	鳳松院	梅田村庵	万蔵寺	川竜院	盛雲院	安盛寺	泉光院	藤先寺	東福寺	宝泉寺	恵林寺	天津院	常源寺	耕春院	金龍寺
同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	曹洞宗
隣松寺	長勝寺	同右	同右	同右	同右	同右	耕春院	万蔵寺	同右	同右	同右	耕春院	藤先寺	耕春院	同右	同右	同右	常源寺	耕春院	賀州宗徳寺	長勝寺
	享禄年中													天正年中					永禄六年	天正年中	
		鯉ヶ沢													小湊	深浦					蓮川村

(73)	(72)	(71)	(70)	(69)	(68)	(67)	(66)	(65)	(64)	(63)	(62)	(61)	(60)	(59)	(58)	(57)	(56)	(55)	(54)	(53)	(52)
浄円寺	善導寺	大善寺	専念寺	大千寺	清岩寺	浄満寺	遍照寺	徳蔵寺	円城寺	西福寺	西光寺	天徳寺	貞昌寺	陽光院	保福寺	宝泉院	福寿院	蘭庭院	高德院	長徳寺	勝兵院
同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	浄土宗	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	曹洞宗
同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	貞昌寺	岩城専称寺	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	隣松寺
													慶長年中								
広須村	八幡村	板柳村	広田村	飯詰村	奥内村						初め浪岡に在り										

(95)	(94)	(93)	(92)	(91)	(90)	(89)	(88)	(87)	(86)	(85)	(84)	(83)	(82)	(81)	(80)	(79)	(78)	(77)	(76)	(75)	(74)
永昌寺	蓮花寺	日精院	法光院	弘法寺	法立寺	専念寺	海満寺	来迎寺	不退院	長福寺	正覚寺	湊迎寺	竜泉寺	専求院	誓願寺	撰取院	白道院	本覚寺	法王寺	莊嚴寺	常安寺
同右	同右	同右	同右	同右	日蓮宗	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	浄土宗
同右	同右	同右	同右	法立寺	洛陽本国寺	同右	同右	同右	同右	同右	誓願寺	同右	同右	誓願寺	岩城専称寺	同右	同右	同右	同右	同右	貞昌寺
					天文二年							寛永二年			慶長元年						
鯉ヶ沢	青森	大鰐村	梅田村	薄市村	開基は日尋に始まる。	蟹田	小泊	黒石	梅田村		青森	十三湊				藤崎村		今別	鯉ヶ沢	深浦	西関村

017	016	015	014	013	012	011	010	009	008	007	006	005	004	003	002	001	000	99	98	97	96
長楽寺	正休寺	明誓寺	願行寺	来生寺	願竜寺	感随寺	蓮心寺	念仏道場	念仏道場	法源寺	念仏道場	念仏道場	海念寺	専徳寺	真教寺	妙光院	実相院	長延寺	正行寺	感応寺	本行寺
同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	浄土真宗	同右	同右	同右	同右	同右	日蓮宗
同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	法源寺	真教寺	同右	同右	専徳寺	真教寺	洛陽東本願寺	同右	同右	同右	同右	本行寺	洛陽本国寺
										文明十三年				天文元年	天文十九年						為信公の世
蟹田	板屋野木村	外浜油川	鯉ヶ沢	鯉ヶ沢	十三湊	黒石	青森	浪岡村	飯詰村	初め、外浜油川に在り	木造村	藤崎村	深浦			梅田村	木造村	板屋野木村	飯詰村	三森村	

(134)	(133)	(132)	(131)	(130)	(129)	(128)	(127)	(126)	(125)	(124)	(123)	(122)	(121)	(120)	(119)	(118)
正心院	自明院	玄松院	蓮住院	快宝院	法隆院	長栄寺	慈雲院	正行寺	円明寺	念仏道場	念仏道場	念仏道場	念仏道場	念仏道場	念仏道場	念仏道場
同 右	同 右	同 右	同 右	同 右	同 右	修 験	黄 檗 宗	同 右	浄土真宗	同 右	同 右	同 右	同 右	同 右	同 右	浄土真宗
同 右	同 右	同 右	同 右	同 右	長 栄 寺	未 詳	享保十年	円明寺	洛陽東本願寺	同 右	同 右	同 右	真 教 寺	願 行 寺	来 生 寺	
館越村	浪岡村	藤代村	賀田村					今 別	初め外浜油川に在り	五所河原村	桑田村	藤崎村	鶴田村	梅田村	吉出村	木造村

右の表(A)に見るように、北奥津軽の神社数は五九社、また(B)が表
示するように、寺院数は一三四寺を数え、両者総和の宗教施設はまさに
二百に及ぶんとしていた。この約二百に及ぶ寺社のうち、圧倒的な量を
誇るの、当然のことながら、近世期のそれである。

それでは、この(A)と(B)のなかで僅少な古代・中世寺社から、果た

して何が導き出せるのであろうか。古きその寺社群の語る古代・中世期
の北奥宗教の世界とは、どのようなものであったであろうか。

まず、表(A)を眺めてみることにしよう。創建年代別にみると、五九
の神社のうち、(4)の勝軍地藏堂、(6)の東照太神宮、(10)の神明社および(38)
から(59)に至る二四社は近世に属するものであり、その意味でいえば、神
社の約過半数は古代・中世期に建立されたことになる。この過半数を優
に超える三五社もの神社を、その別当別ないしは宗派別に分類してみ
ると、(4)の勝軍地藏堂を除く(1)～(5)は真言宗に属し、(6)～(9)は天台宗、そ
れ以外の(8)～(59)は神職に属している。神社の別当が各々、真言宗・天台
宗および神職に所属していたこと自体、北奥地域の神仏習合を余すところ
なく説示するものであるが、実はこうした習合的事実以上に、この表
(A)は重要な史実を秘めているように思われる。

すなわち、(11)の八幡太神社から(30)の日照田薬師如来堂に至る一九社は、
殆ど延暦十一・十二・大同二年の期間(七九二年～八〇七年)に、かの
坂上田村麻呂によって建立されているのである。田村麻呂が延暦十(七
九一)年、征夷大將軍大伴弟麻呂の下に征東副使として蝦夷征討に向か
い、同十六年に自ら征夷大將軍に補任されたこと、さらには大同二(八
〇七)年、胆沢の地に築城してここに鎮守府を移した一連の蝦夷平定の
業績に徴すれば、延暦十一年から大同二年に集中しているその神社建立
年時も首肯されよう。

この坂上田村麻呂による神社造立ないしは田村に仮託した神社建立は、
年代的にも全く符合しており、この点、『津軽一統志』の本項は怪しむ
に足らない。

だがしかし、一方の真言宗寺院が別当を勤仕する(1)の岩木山三所大権現、(2)の八幡太神宮、(3)の大聖不動明王、(5)の聖観音に眼を転ずるとき、『津軽一統志』の「神社 仏閣」項に多少の疑念を抱かざるをえなくなる。

(1)の岩木山三所大権現の創建時である延暦十五(七九六)年は、空海の入唐と真言宗将来が延暦二四―二五年であることに思いを致せば、明らかにこの創建年時と別当名は事実誤認であるとしなければならぬ。

さらに、(3)の大聖不動明王と(5)の聖観音の創建者について、『津軽一統志』は前者に關し「此山往昔円智上人唐僧開基阿遮羅山」と伝え、後者に関し『新撰国誌』は、その別当寺の久渡寺を僧円智の創立と伝え、ともに僧円智を創立者とみなしている。この僧円智が紛れもなく真言僧であれば、少しも疑義を呈する余地はないのであるが、実はこの僧円智を語る部分の『津軽一統志』はかなり流動的で曖昧糊としていのである。すなわち、一方の大聖不動明王を伝える項では、右懸山のことを「此山往昔円智上人唐僧開基阿遮羅俗呼而為阿婆羅古へ置三千房」開辟年月于考不詳」と、円智上人の仏教的立場を大聖不動明王の別当たる国上寺真言宗と捉えて、開辟年時のことを不詳としながらも、さも円智上人真言僧のように記述している。

また一方の(7)の深沙大権現、天台宗を伝える項では、

「当国者中日本良之間往古移比叡山而置三千坊所謂阿遮羅千坊トサ十三千坊東嶽千坊者南部迄有ト云神宮寺阿遮羅千坊之一也云延暦年中田村麻呂請東夷征伐之勅而卒五万八千之宮兵征凶徒之時戰不利依之所仰佛神之威力則有感應此御神現夜舟形

護衛將軍麻呂是当一社」

と、前の円智上人の開基と伝える阿遮羅の三千坊のことを、天台宗の根本道場たる比叡山との関わりで捉え、しかもこの深沙大権現の建立を坂上田村麻呂に関連づけて伝えている。

ここに至っては、私たちは『津軽一統志』が円智上人の描写をめぐつて、ある種の史料の錯誤を犯していると認めざるをえない。

思うに、坂上田村麻呂を媒体として、蝦夷平定事業に血道をあげる桓武天皇、官僧かつ天台僧である最澄をこの上なく重用し続けた桓武天皇、この桓武天皇を中心軸とした坂上田村麻呂と最澄の三者が思い描く政教関係の構図にあつては、『津軽一統志』が前述の如く時代誤認する真言宗がその中核となることは全くありえない。平安前期における北奥宗教界に君臨していたのは、やはり天台宗であつたと考えられる。推測に推測を重ねていえば、古代北奥の宗教界は、天台宗の一角に塗りつぶされるほどであり、その教勢は坂上田村麻呂と相乗することにより、日に日に不動のものとなつていった。

あまつさえ、(2)の旧名大浦八幡宮と伝える八幡太神宮の旧在所たる鼻和庄八幡村は、『津軽考』に田村麻呂將軍の陣所が定められた所という。してみれば、表(A)の真言宗神社の別当と伝える。(1)・(2)・(3)・(5)の四社は、原初的には、決して真言宗などではなく、その好敵手たる天台宗に属していたと考えるのが、理の当然ではないだろうか。

そういう意味からも、天台宗が別当を勤めたとされる(7)・(8)・(9)の三社は、平安前期の桓武天皇―坂上田村麻呂―最澄という三者一体的な政教構図から推しても、いとも易く推定できる。この時代的にも矛盾なく

整合する三社のうち、とりわけ(7)の深沙大権現の縁起を伝える前引もした、「当国者日本、良之間、往古移比叡山」に始まり、天台宗比叡山と坂上田村麻呂との政教一如を説く一文は、当該地域における古代宗教界を見事に活写したものであるとともに、当該宗教界の最古層を描写した古態図であるといってもよいだろう。それゆえ、弘法大師と関係付けられる(23)の桜庭千手観音堂、いつの日か真言宗に転じたとされる(28)の藤崎熊野大権観、ともに真言宗寺院を別当に持つと伝えられる(34)と(35)の十腰内観世音・大石明神なども、その建立当初から真言宗に属していたのではない。前の(1)・(2)・(3)・(5)と同様の理由で、当初は天台宗の神社に始まり、それがある時期に真言宗に改宗したものと解される。この改宗については後述することになる。

その中にあって、北条時頼の開創とする(37)の鰺ヶ沢八幡太神宮は、時頼廻国伝説と関わるだけに、一際異彩を放っていて注目される。

以上、表(A)の神社の建立事情をめぐって、その古代神社の建立には坂上田村麻呂が深く関わっていたこと、『津軽一統志』が真言宗系と伝える神社も、当時の歴史的背景を考慮する時、それは真言宗系に端を発したのではなく、天台宗系に属する神社として始まったこと、したがって、その意味では、古代北奥の宗教界は、桓武天皇―坂上田村麻呂―最澄の三者が切り結ぶ天台宗の主導する宗教地平にあったことなどを、粗々推測的に考えてみた。

かといって、この小稿の仏教史的アプローチをもって、『津軽一統志』の史料価値を直ちに云々することは早計である。口承・書承を問わず、伝承に左右されることの多い当該の宗教史的分野にあっては、古代と中

世の歴史断層が時として錯綜されることも、避け難い一側面かも知れない。その限りに於て、『津軽一統志』の「神社仏閣」項に対する前述のような理解も、一近世人の古代・中世宗教史理解を示していたといえよう。さて、次に寺院の来歴を伝える(B)表の検討に移ることにしよう。一瞥して瞭然のごとく、その寺院の総数は一三四にも及び、そのうちの(1)の百沢寺、(2)の最勝院、(3)の国上寺、(5)の久渡寺、(6)の大円寺、(8)の高伯寺は古代・中世における真言宗寺院であり、(10)の神宮寺と(11)の東福院および(12)の袋宮寺は同期の天台宗寺院である。

まず、(3)の国上寺であるが、これは前引した『津軽一統志』の「此山往昔円智上人唐開基阿遮羅山」にみるように、円智上人に縁が深い。

また(5)の久渡寺も、『新撰国誌』の伝に従えば、僧円智が小沢山救度寺と称して創立したという。いっぽう、(1)の百沢寺・(2)の最勝院・(6)の大円寺そして(8)の高伯寺はいずれも移転を繰り返した寺院である。具体的にいえば、(1)の百沢寺は『津軽一統志』が「往日有山東腰内村」と伝える如く、もともとは十腰内村に開基されたものであった。(2)と(6)および(8)の各々、最勝院・大円寺・高伯寺も、その初めは大浦種里村に所在していた。

変転を重ねたこれら真言寺院と伝えられる寺院も、(3)の国上寺および(5)の久渡寺と同じく、円智上人天台宗僧に陰陽に関わるものがあつたと想定するなら、国上寺・久渡寺がそうであるように、当初は天台宗寺院として開基され、しかる後に真言宗へと改宗したのではなからうか。

次いで、天台寺院と伝える(10)の神宮寺と(11)および(12)の東福院・袋宮寺であるが、そのうちの神宮寺についていえば、同寺は大同二年の創建に

なり、その拠るべき史料は前に(A)表の(7)の「深沙大権現」に引いた『津軽一統志』の「当国者中日本良之間往古移移比叡山」に始まる一文である。前述もしたように、この一文は桓武天皇・坂上田村麻呂・最澄の三位一体的な政教一如の態を窺見して余りあるものであり、この点からもこの(10)の神宮寺は、最も古態を留める天台寺院であるといえよう。

北奥の古代仏教界は、したがって、この天台宗の名刹たる「猿賀山長命院神宮寺」を中心に、中世のある時期以後に真言寺院と伝えられてきた百沢寺・最勝院・国上寺・久渡寺・大円寺・高伯寺なども、天台宗系寺院として開基され存在していたのではなからうか。

それ以外の圧倒的多数は、悉く近世寺院に属すが、その中であつて、(14)の曹洞宗寺院の長勝寺と(31)の耕春院、(60)と(81)の浄土宗寺院たる貞昌寺と誓願寺、(90)の日蓮宗寺院である法立寺、(102)と(107)の浄土真宗の真教寺と法源寺、(128)の修験の統轄寺院たる長栄寺などは、概ね中世後期に建立され、近世に及んで当該宗派における地方の中本寺として数多くの末寺を輩出していった寺院群である。

こうして、『津軽一統志』の「神社仏閣」項により古代・近世を通観してみる時、古代・中世に北奥仏教界に君臨した天台・真言両宗の寺院群の宗教的拡張は、近世に及んでは顕著な展開をみせることがなかったといえそうである。それよりはむしろ、鎌倉時代に所謂、新仏教として興起した浄土宗・浄土真宗・曹洞宗・日蓮宗などの諸宗派が、庶民仏教として広く民衆の中に受け容られていった側面の方がことのほか、際立っている。

古代・中世に榮を誇った天台・真言両宗の寺院群に対して、さしたる注意を払わず、時の移ろいとともに古き伝承が風化することが多かったために、あるいは前に少しく指摘した真言宗系神社のような年代錯誤ないしは事実誤認がそのまま放置されることになったのではあるまいか。

以上、表(A)と(B)に多少の検討を加えてみたが、二つの表にみる約二百に及ぶ神社と寺院とが、混然一体となった存在自体、当該地域も本州の他地域と同様、神仏習合の思潮下にあったことを今一度ここで確認しておきたい。

また、古態を示すであろう古代の神社や寺院のいくつかは、前に少しく触れたように、時の政治拠点の移動とともに移転を余儀されており、その点『津軽一統志』に描く寺社像が原初そのものを伝えているものではないことは、留意すべきである。少し具体例を挙げるなら、表(A)の(1)の岩木山三所大権現の別当寺院である百沢寺は

「別当寺、院者往、日有山、東十腰内村、此時詣於山、道俗有逢、怪異之難、故奉祈誓大権現、仰神託之、処勅曰、從是南、腰超、一百之溪澗、而建寺院、須登山云々、因而移来寺坊、於今之所、号寺、呼邑、于考年月不詳」

というように、その当初は十腰内村にあった。同じく、表(A)の八幡太神宮も『津軽志留遍』によれば、もとは鼻和庄八幡村にあったのを、天正元(一五七三)年、津軽為信の世に堀越城の北に遷座し、さらに慶長十七(一六二二)年、信牧が現在地に勧請して弘前の鎮守に定められたという。表(B)の(2)の最勝院も、「初め大浦種里村の一森に在り、文禄中、堀越村に移り、正保四年、今の南溜池の上に移された」という。

このように、北奥の宗教世界の古層を形成する寺社群の存在地点を通して、当該地域の原風景を推察すると、ほぼこのような風景描写が粗描できるのではなからうか。

すなわち、当初天台宗に始まったと考えられる国上寺の立地する碓ヶ関、その昔阿闍羅山とその山中に三千坊の僧舎を有したとされる早瀬野や宿川原、さらには、当初天台宗であったと思われる大円寺・高伯寺の厳存する蔵館・大鰐地域。これに隣接する石川村には坂上田村麻呂将軍が建立したと伝える森山毘沙門堂が存する。この碓ヶ関―大鰐地域は、桓武天皇―坂上田村麻呂―最澄という三者一体の政教一如の態が顕現した北奥における古代仏教界の巨大なメッカであったのではないか。

その意味からも、斉藤利男の「境界の中世都市、大鰐・宿知原」⁷⁾は的確な見通しに立脚した注目すべき論考である。

しからば、碓ヶ関―大鰐地域がこのように北奥仏教界の巨大メッカであるとするなら、これを除いて当該地域の宗教拠点は存在しなかったものであろうか。恐らく、そうではないだろう。

『津軽一統志』が「古跡」として「十三湊当城北小泊崎並其中間者山也。要此地有湖水謂十三湯当郡大小十三之河水于此所落テ而入於海（中略）是境之佳景三王坊ト云人所著之十三往来ニ詳二見ヘタリ」と紹介した十三湊の宗教施設たる津軽山王坊については、その『津軽一統志』も『十三往来』に譲って多くの筆を割こうとはしなかった。

思うに、この山王坊も、中世安東氏の祖たる古代安倍氏の世において、他の寺院と同様に天台宗寺院として十三湊の地に建立されていたのではなからうか。安倍―安東氏という当該蝦夷社会の雄が、後日、日蓮が

「安藤五郎は因果の道理を弁へて堂塔多く造りし善人也」と評したように、中世の『宇都宮家武条』⁸⁾に見る宇都宮氏に比しても決して遜色のない相当大規模な宗教施設を構えたことは、いとも容易に推定される。

とするならば、古代における北奥の宗教界は、推測に推測を重ねると、藤崎・碓ヶ関・大鰐地域が宗教的拠点として存在していた。この地域は、坂上田村麻呂将軍の蝦夷征討という名の古代律令国家にとっての支配の北限を示す場でもあった。その周辺には、言うまでもなく、前述の数多くの神社が造営されていた。

そして同時にこの界隈は、視点をかえてみれば、蝦夷社会の中枢を担う安倍―安東氏にとつての支配版図の南限を示す境界でもあった。つまり、安倍―安東氏は、自らの支配版図の中に、藤崎、碓ヶ関、大鰐地域という一大拠点とともに、今一つ十三湊の津軽山王坊という宗教拠点も併せ持っていたのである。前者が政教一如の形としての宗教メッカとするなら、後者は北奥と道南との円滑なる人的のみならず物的交流を図る上での、航海安全と豊漁を祈願する祈祷メッカであったのではあるまいか。古代北奥の仏教界は、このように天台宗に色濃く彩られた二つの宗教拠点を有していたと考えられる。

それでは、こうした天台宗的世界の濃厚な古代北奥の仏教界は、中世においてどのように展開するのであろうか。

三 北奥宗教界の中世的転回

鎌倉前期の幕府は、奥州平定に絡む源義経・平泉藤原氏一族の討滅に流した非情の血を想念してか、その東国の地を手厚く鎮魂供養すべき禁忌の地と捉えることが多かった。¹⁰ それゆえ、この時期においては、幕府と東国地域とが宗教史的にそう際立った関わりを持つことは少なく、その意味で、鎌倉前期の北奥の仏教界は、古代の延長上にあつて、依然天台宗の色彩が強かったと思われる。

がその北奥宗教界にも、鎌倉時代の中後期に予期せぬ大きな変化が起こる。その変化を決定付けたのは、他でもなく幕府自らが志向し創出したといった独自の宗教政策の展開である。¹¹ その宗教政策とは、ごく簡単に言えば、公家政権が標榜する天台宗中心の「顕密主義」¹² 仏教に対して、幕府が公権力の立場から採用した真言密教と臨済禅の和合たる「禅密主義」¹³ 仏教を中核とした政教運営のことをいい、かかる宗教政策が幕政において段階的に推進されていた。

すなわち、幕政前期において芽生えた真言密教への傾斜は、その中期に臨済禅の採用の結果、「禅密主義」政策として成立を見、幕府後期にはその政策が本格的な展開をみせながら終末を迎えるのである。こうした公権力たる幕府による「禅密主義」仏教政策と東国とが現実的な関係を持つのが、実に幕政中後期のことである。前述の「予期せぬ大きな変化」とはまさに、幕府と東国との間に発生したこの関係に他ならない。言葉をかえていえば、幕府の志向・創作した「禅密主義」仏教政策が、幕府の宗教的祭祀権として、東国の地に現実のものとして行使されたの

である。これまで天台宗一色に彩られてきた北奥仏教界が、この幕府による反天台宗の立場からする「禅密主義」の宗教指導を余儀なくされるとき、いかなる異変が生ずるかは、もはや火を見るよりも明らかであろう。

まさに天台宗からの中世的転回がそれである。次にこの転回について、少しく眺めてみることにしよう。

まず、『津軽一統志』が伝える次の一文に注目したい。

「唐絲前 此所有墳墓 曰伝最明寺時頼鎌倉副元師 北條相模守之妾唐糸、云者諱死於此所 其古墳石碑等存于今 因而名之。

曹洞縁起誌満藏寺之篇略而之伝説 曾藤崎村有唐糸云者、時頼公之妾也。依婦人妬弘長年中遷于茲矣。愁苦時移、形容枯悴于時有

最明寺廻国之唱 而曰駕已入于彊也。唐糸謂其婢云、我曾為時頼所愛 偏依有色也。今有何面目而再見此人哉

自抱石投水不堪 最明寺哭泣 因而為之建護国寺、焉已及還 駕到处値 一七日 則建一七山 値 一十七日、則建一七

山 其遺跡曰存于今也。

(中略)

按往昔此所有曰平堂教陣 古跡初開不詳、常陸阿闍利居焉時 領主極樂寺殿建長年中信佛仰法 而歸依常陸殿堂之花麗倍于往古 寄附多之田畑 改号靈基寺、之処経星霜 而柱梁漸荒敗 此時最明寺為巡国東行 聞龍姬唐糸事 不堪哀哭 為薦其冥福 弘長一年繼絶 旧跡、興廢 名藍 而建一精舍 号改護国寺 以臨濟為宗 俾大学禪師 為初祖 田舎花輪平賀三郡 充

供給費^{ヘニ}其後世乱^シ邦忙^ヲ而終不^{シテ}全^ク寄與地^ニ而有無相半^ニ因^テ之又改^メ宗曹洞^ニ更^{ヘテ}名^ヲ滿藏寺^ニ如今移^リ来^リ于弘城^ニ列^シ長勝門内^ニ成^シ耕春門徒^ノ故^ノ往古所^ニ呼^フ墳墓^ノ之地者名耳^ノ旧^ニ而謂^フ斷^ト寺跡^ト」

この一文によれば、唐糸御前の旧跡を伝える滿藏寺址（現在、長勝寺に存す）は、もともと、何宗かは不明であるが、平堂教陣という古跡に端を発している。常陸阿闍利なる僧のときに、この平堂教陣が極楽寺殿^Ⅱ北条重時の信を得て「靈基寺」と改号。そしてかの北条時頼が東国巡遊の際、曾て寵愛して止まなかった当該地出身の唐糸のことを想うあまり、廃れていたこの「靈基寺」を再興して「護国寺」とその名も改め、はじめて「臨濟宗」寺院に列した。その後、幾星霜を経て「滿藏寺」と改名して曹洞宗寺院となり、現在も曹洞宗の名刹・長勝寺内に存在する。この一文を通して、一寺の来歴も決して平坦ではなく、「平堂教陣」↓「靈基寺」↓「護国寺」↓「滿藏寺」というように変転していることを知ることが出来る。「平堂教陣」が何宗に属すかは史的根拠もなく不明とするしかないが、小稿の行論に従って推則すれば、やはり天台宗かと推定されるのみである。

それとはともかく、ここでの最大の関心事は、この唐糸御前の悲恋史話が北条時頼の廻国伝承とセットをなして語り継がれ、しかもこの両者を切り結ぶクライマックスが「護国寺」という臨濟宗寺院の建立をもって構成されている点である。この時頼の廻国と臨濟禪院の護国寺建立が、前にみた幕府の「禪密主義」仏教政策の現実的反映の産物であることは、容易に見通せるところであらう。そしてまた、「平堂教陣」が仮りに天台宗に始まったものであるなら、ここにも天台宗から臨濟宗への明白な

形で改宗があったことを推定しなければならない。

私たちは、松島寺や出羽立石寺とともに、この北奥の中世的仏教界にも、幕府の「禪密主義」なる宗教政策の反映結果として、天台宗から臨濟禪への幕府主導に基づく改宗事実が存在したことを、ここに知り得たことになる。

また、『古典文庫』所収の「地藏菩薩靈驗記」巻九之五に伝える

「往日、鎌倉ニ安藤五郎トテ武芸ニ名ヲ得タル人アリケリ。公命ニヨリ夷嶋ニ発向シ、容易夷敵ヲ亡シ、其貢ヲソナエサセケレバ、日本ノ將軍トゾ申ケル（中略）爰ニ彼ノ五郎、年来地藏ヲ信ジ、長三尺ノ地藏ヲ造立シ安置シ奉リ、誦經礼拝ヲコタラズ（下略）」に始まる「建長寺ノ地藏夷嶋へ遊化ノ事」なる仏教説話は、北条時頼の直接的な廻国という形をとらないものの、安藤五郎の拠る津軽に至るまで、建長寺の地藏信仰の形式をとった一種の時頼廻国説話が流布していることを示している。この仏教説話が、前の幕府の「禪密主義」仏教政策をその背景にもつてあらうことは、ほぼ察しがつこう。

前の唐糸御前と護国寺の建立のように、この説話には、天台宗から臨濟宗への改宗という山場はないが、幕府の「禪密主義」仏教政策と表裏した時頼廻国伝承と深く関わっているという点で、その説話の根幹は全く同一であるといってもいい。

直接的な改宗を伴わないが、時頼の廻国を通して、幕府の「禪密主義」なる仏教政策が宗教的祭祀権の行使という形で現実化した例として、『秋田県史』資料古代中世編に収める出羽国由利郡象潟満満寺に伝わる「象潟干満寺者

八幡菩薩降臨之砌也、従当寺目通四方二十丁余準先規令寄附之状如件

正喜元丁巳年

八月十三日

道崇(花押)

という史話も挙げることが可能である。

幕府による「禪密仏教」政策の北奥地域への遂行は、独り臨濟禪への改宗だけではない。「禪密仏教」という臨濟禪と真言密教の総和の上に成り立つ仏教政策である以上、真言密教の扶植も当然存したことは論を俟たない。

『日蓮遺文』が伝える次の二史料に注目したい。

(一)真言師だにも調伏するならば、弥よ此国軍にまくべし(中略)あぞは死生不知のもの、安藤五郎は因果の道理を弁へて堂塔多く造りし善人也。いかにとして頸をばあぞにとられぬぞ¹⁾

(二)文永五年の比、東には俘囚をこり、西には蒙古よりせめつかひ(責使)つきぬ。日蓮案云、仏法不信なり。定て調伏をこなわれんずらん。調伏は又真言宗にてぞあらんずらん²⁾

右の二つの史料の大意を、「文永五年の比、東に俘囚が反乱を起し、その過程ないしはその結果、堂塔を多く造営もした津軽の蝦夷管領Ⅱ安藤五郎はあぞに殺害された。それは安藤氏が真言宗を信奉したからである」と取れるなら、そこには前にみた津軽山王坊や藤崎・碓ヶ関・大鰐地区の寺社群という二大宗教拠点における天台宗から真言宗への一大改

宗事業が存したに相違ない。

古代の安倍氏の血を引く津軽安藤氏が「因果の道理を弁へて」二つの拠点地域に多くの堂塔を造営した。「蝦夷管領」という幕府の行政的使命により、安藤氏は自ら幕府の掲げる「禪密仏教」政策を、天台宗から真言宗への改宗事業として試みた。その結果、ひとつの宗教拠点である津軽山王坊においては、あぞのために殺害される羽目になったが、恐らく今ひとつの巨大な宗教メッカであった藤崎・碓ヶ関・大鰐地区においても、既掲A表の大聖不動明王・聖観音を筆頭とする天台宗系の諸社、B表の国上寺や久渡寺に始まる天台宗系寺院群は、いずれも真言密教へと首尾よく改宗を遂げたに違いない。古代において、桓武天皇―坂上田村麻呂―最澄の三者によつて彩られてきた北奥の天台宗的仏教世界も、ここに装いも新たに、真言密教系の世界へと変容することとなったのである。

『津軽一統志』の「神社仏閣」項が、天台僧Ⅱ円智上人に関わる大聖不動明王・聖観音・国上寺・久渡寺などの天台宗寺院を真言宗寺院として誤認してしまったのは、鎌倉時代における天台宗から真言密教寺院への改宗一大事業自体が、近世の『津軽一統志』の編集時には、全く忘却の彼方であり、伝承もされていなかったからであろう。北奥においては、その古代から中世にかけて、前の「満蔵寺」の沿革に例をみる如く、「平堂教陣」↓「靈基寺」↓「護国寺」↓「満蔵寺」と寺名のみならず、その宗派名も天台宗↓臨濟宗↓曹洞宗というように現実に変転していたのに。

幕府の宗教的祭祀権の現実化の結果、北奥仏教界が天台宗系的古代

世界から真言密教系の支配する世界へと変貌していったことは、ほぼ間違いない。その変貌の一端を伺う一コマとして、次に『大日本地名辞書』⁽¹⁶⁾が『新撰国史』の伝える「中別所村の東、フネン沢の畑中に、石碑四十余枚あり」を受けて記した石碑についての一文に注意してみたい。

「四十余碑石、草茅榛棘の裏に没し、傾倒殷壞狼籍を極む（中略）一碑、高一丈六寸幅一尺三寸厚九寸、右志者於現当為二世之追善石塔（梵）三本立之以余薰普及法界衆生而已」

弘安十年丙寅八月日 紀中納言末孫橘範綱敬白

これによれば、中別所（船沢村の一部）に残存する四十余の碑のひとつとして刻まれたこの碑は、かの文永・弘安の役の直後の弘安十（一二八七）のものである。幕府がその襲来の難を除くべく、真言密教に大きな期待を寄せて、種々の祈禱を修したことは多言を要しまい。この幕府による元寇を対象にした真言密教祈禱の他に、北奥においては蝦夷反乱が幕閣の頭を悩ませていた。その折も採り入れられたのは、やはり真言密教の祈禱修法であった。

とすれば、右の弘安十年の造碑は、対元寇を考慮したものとも、また蝦夷反乱を憂慮したものとも捉えうる。『大日本地名辞書』は、四十余碑の最古は弘安二年のものともいう。推測を逞しうするなら、北奥中世の宗教界における真言密教化の営みは、現地にあってはこうした日々の造碑などを通して行われていたのではあるまいか。

古代の北奥仏教界が桓武天皇―坂上田村麻呂―最澄を中心軸に天台宗系色に染め抜かれたのを、いま中世のそれは、鎌倉幕府―北条時頼―「禪密仏教」によって彩られようとしている。

それにつけても、北奥の地域は、古代と中世の別を越えて、ある一定の傾向に傾斜しやすく染まりやすい風土なのであろうか。それは当該地域と公権力なりの外なる条件との相対的關係による所が大きく、そう一概には言えないだろう。鎌倉時代には、鎌倉幕府―北条時頼―「禪密仏教」という政教図式が、宗教的祭祀権の行使という形で、北奥地域に投入されたのである。

かといって、北奥の全域がその図式化を受けた訳ではない。例えば、「恐山」の「地藏堂」について、『大日本地名辞書』は、こう伝えている。「貞観中、慈覚大師の開山と称すれど、享縁三年、田名部円通寺、宏智聚覚和尚中興の後は、曹洞宗に属す」⁽¹⁷⁾

これによると、恐山は古代において、最澄の高弟円仁⇨慈覚大師によって開かれた後、享縁三（一五三〇）年に至って曹洞宗に改宗するまで、長いこと天台宗であり続けたことになる。

この事実を以て、鎌倉時代における「鎌倉幕府―北条時頼―禪密仏教」という政教構図の北奥地域への投入を、挫折・破綻と見なすのは甚だ早計である。前近代におけるかかる施策をローラー作戦の如き近代的な画一主義の視角から論ずるのは、非歴史的であろう。

ことの本质は、鎌倉幕府の公権力としての宗教的祭祀権の現実的行使が北奥地域になされたか否かに存するのであり、その現実的行使における多寡が最重要ではない。「鎌倉幕府―北条時頼―禪密仏教」なる宗教政策が、政策としての位置付けを保持しながら、量的ではなく質的に現実になされたか否かがより本質的で重い意味を有すると考えられる。

その点からいっても、「恐山」における天台宗の未改宗は、古代的な

慈覚大師信仰Ⅱ天台宗の保持の強烈な連続性を示すものであり、これを以て鎌倉幕府の宗教政策の限界や挫折をいうのは正しくない。広域な版図の中で、拠点を中心にその施策が実施されたことの方が、決定的に大きな意味を有することは言うまでもない。

以上、北奥地域を中心に仏教界を眺めてきたが、それでは、他の東国地域においてはどうかであろうか。次に項を改めて、「自治体史」の中にそれを少しく探ってみることにしよう。

四 「自治体史」の描く東国仏教界

既述したように、古代北奥の仏教界の基調は、天台宗的色彩が濃厚な点にあり、その主要な部分が、鎌倉時代に至るや、幕府の「禪密主義」仏教政策によって、臨済禅や真言宗に改宗することとなった。こうした幕府の宗教政策の痕跡を留める自治体史が、果たしてどれほど存するのだろうか。その自治体史の中に、幕府との政教関係が伺えるものを数例、紹介してみよう。

岩手県胆沢郡の『金ヶ崎町史』に伝える功德山観音寺は、寛平三（八九一）年に慈覚大師円仁が開基したといい、建立当時は天台宗に属していたが、今は真言宗であるという。¹⁸これ以上を語らない『金ヶ崎町史』であるが、小稿の関心でいえば、慈覚大師―天台宗という開基パターンは、東国社会にはごくありふれたもので、一般的であるとさえ言える。

この寺の天台宗から真言宗への改宗の時期としても、最も可能性の大きいのはやはり、鎌倉中後期ではあるまいか。

また、岩手県の『大船渡市史』に散見する竜福山長谷寺は、大同二（八〇七）年、坂上田村麻呂が祀った十一面観音堂に由来し、少し後の天慶九（九四六）年、近江国石山寺の隠住僧の淳祐学匠を招請して開山としたという。そして鎌倉時代には同寺の中に数多くの供養石塔婆が建立されたともいう。¹⁹

坂上田村麻呂に因んだ開基は、ごく一般的な開基として問題はないが、同市史には淳祐なる僧が何宗派に属すか、またこの長谷寺が何時から真言宗なのかについて言及していない。これまた、右の観音寺の改宗パターンに従えば、近江国石山寺の淳祐は天台宗僧の可能性が強く、天台宗から真言宗への改宗時期も、同市史の指摘する同寺の隆盛時たる鎌倉中後期ではなかろうか。

慈覚大師信仰が隆盛を極めた東国の古代仏教界は、中世に及んで鎌倉幕府による「禪密主義」政策が拠点的に施されても、前述した北奥恐山のように、依然天台宗を保持信奉する地域もあった。このことが、東国社会における平安仏教たる天台宗と真言宗の残存・伝承のあり方をなお一層混乱させている。

秋田県の『鹿角市史』に見える「大日信仰と天台宗」の叙述も、教義的に言えば、大日如来像を伝える大日堂は真言宗であって、決して天台宗に説くところではない。この地域に想定される小豆沢・長牛・独鉦を核として津軽街道沿いに岩木川河口の十三湊へ達する「大日信仰の道」²⁰も、あるいは小稿の既述した藤崎―碓ヶ関―大鰐地域および津軽山王坊の十三湊地域という、古代―中世における北奥の宗教的拠点と相通ずる道であるかも知れない。

とすれば、『鹿角市史』にいう「大日信仰と天台宗」も、古代における天台宗流布のみに眼を奪われ、鎌倉期の真言密教化の営みが風化してしまったが故に、天台宗だけの彩りになってしまったのではなからうか。この地域にも鎌倉期の天台宗から真言宗への改宗の可能性は十分に有り得ると思われる。

鎌倉幕府による東国地域への宗教的指導²¹「禪密立義」政策の施行は、前の真言密教化という改宗の営みと、今一つは北条時頼の廻国伝承、さらには鎌倉五山僧の巡錫を通して行なわれた。

そこで次に、後者の五山僧侶を通した幕府の「禪密主義」政策の片鱗を探ってみることにしよう。

まず第一に、福島県の『国見町史』に見える光明寺・正光寺・松音寺・正法寺などの臨済寺院の建立は、一山一室を初めとする鎌倉五山僧との法交によるものであるのに加え、伊達郡小手母田満福寺なる臨済寺院には、鎌倉幕府の宗教指導を重点的に蒙った出羽国立石寺（天台宗から臨済宗に改宗）と伝法上の密接なつながりがあったことを証明する「大般若経文」が存する。²²この満福寺と立石寺の関わりは、広域にわたる東国の規模での鎌倉幕府の「禪密立義」政策の地方展開を示しているといえよう。

福島県の『若松市史』の「瑞雲山興徳寺」も、弘安十（一二八七）年、臨済禅僧の大円禅師の開いたものであり、これも右の臨済寺院と同様、鎌倉文化の地方的展開の産物といえよう。

次いで、青森県の『十和田市史』に伝える地福山法蓮寺は現在、曹洞宗に属しているが、もともとは、鎌倉中期に天台宗から臨済宗に見事な

改宗を遂げた松島寺の中興者・法身（法心）が開いたもので、その宗派は勿論、臨済宗であった。これが曹洞宗へと転じたのは近世に入った承応四（一六五五）年のことという。²³

また、山形県の『長井市史』によれば、現在は廃寺となった慈雲寺山資福寺は、長井氏の三代時秀が鎌倉五山の影響を受けて、弘安四（一二八三）（一二八一―八四）年の頃に創建したものである。²⁴同市史はさらに、安久津八幡神社において、弘長三（一二六三）年、金沢文庫本の『教相義釈』および『三周義釈』という仏教經典の書写が行われていたことを伝えている。²⁵

この安久津八幡神社は、山形県の『高島町史』では、貞観二年、慈覚大師の建立したものと伝え、さらには同社は中世に及んで、鎌倉鶴岡八幡宮の分霊を奉遷したとも伝えている。²⁶ここに至って、『長井市史』に見る資福寺といい、この安久津八幡神社での写経事業といい、いずれも出羽国と鎌倉とを切り結んだ文化的連環のなせるものであることが、明瞭に知り得たことになる。

伊達郡小手母田の満福寺や長井市の資福寺のように、廃寺となった旧名刹には、伝承の世界からさえ、遠ざかってしまった鎌倉時代における幕府の「禪密立義」政策―五山文化の伝播が存したことを看過してはならない。

幾重にも重層して伝わる歴史断層には、時として時代を見まがうようなものも存す。しかし、それを可能や限り復原し、中世的風景の何たるかを直視しなければならぬ。東国の地域には、そういう意味での掘り起こし作業が今なお現存することを、旧き名刹群は語りかけているよう

に思える。

五 『住心院文書』をめぐって

今ここに、高橋富雄博士の高論「中世文書から見た平泉問題」がある。その昌頭に、『住心院文書』の全文²⁶平泉関係文書の全文が紹介されている。本文書はいろいろな点で、従来の不明部分を照らし出す貴重なもので、氏の本文書の解釈を踏まえた行論もかなり意欲的で説得力に富んでいる。

四箇條の事書から成る本文書のうち、小稿の課題と直接関係する前半の第一項と第二項を、次に掲げることとする。因みに、高橋氏はこの四箇條を、便宜的に、『第一項別當進退條』、『第二項顕密両宗條』、『第三項堂塔修理條』、『第四項夫役配分條』と呼んでいる。

一 衆徒分所帯別當進退否事

右、對決之處、如隆覺等申者、建久・承久御教書者、被下寺僧等中畢。非別當進止之條、明鏡也當時樂人・舞人參拾陸人所帶者、寺家全不致其妨。至寺僧分、爭可令進退哉。右大將家御時、別當理乘房、致非例之間、依衆徒之訴訟被改易畢。代々別當、不致濫妨之處、當時爲別當進退令宛行之條、無其謂云々。如榮賢申者、建久・承久御教書事、或被止國中地頭之妨、或給衆徒身暇之由、被載之。非地頭進止之由、所不見也。最初、別當賢祐、令寄進講田以來、無縁之衆徒、歎由之時、爲寺中興隆寄置歎田・給田・祭田事、及百陸拾町歟。是併寺僧之依怙、

別當之進止也。被召出代々任符、不可有其隱。樂人・舞人所帶事、自上令拜領之間、不足准據云々。隆覺申云、衆徒所帶、清衡・基衡・秀衡之時、有補任之供僧。又代々別當之時、有寄附之料田、本新不各別。有其闕之時者、依衆徒之舉、撰法器之仁、別當所成下知狀也。准恩顧不可號別當進退。不相論之外、不成任符。如承久元年御下者、中尊寺供僧四人、或本所兼帶之、或一向新供僧也。與別當遂對問可安堵之由、被仰下之上不及子細云々。榮賢申云、右大將家御時、爲沒收之地被補別當畢。本供僧一向進退之。況於新供僧哉。又相論之時、依法器任道理令裁許之條、勿論也。又無相論之外、不成任符之由、令申之條、無實也。可被問衆徒歎云々。爰如衆徒所進右大將家建久二年十月十日御下知狀案者、下、陸奥國地頭等、可令早停止其妨、任先例、致沙汰、平泉寺領事、右、地頭等、寄望彼寺領、致妨事、可令停止也。縱於堂塔者、爲荒廢之地、雖無佛聖燈油之勤、至地頭等者、可令停止押領云々。如建久十年三月廿九日政所下文者、下、陸奥國伊澤郡、可早以日高林内中尊帝尺堂寺田參町、勤行佛等事云々。如信濃守六月廿五日不記奉書者、當國中尊・毛越寺僧訴訟事、條々聞食披畢。別當職、以他人可被改補也。寺僧等歸寺、如本可令安堵云々。如圖書允清定承久元年六月十八日奉書者、平泉中尊寺住僧四人、依別當法橋之訴訟、遂對決之處、無指罪料之間、給身暇所被下遣也。如元可令安堵云々者。建久御下知者、被止國中地頭之妨。承久御教書者、衆徒無罪料之間、可令安堵之由、被載之

歟。次樂人・舞人等所帶、非別當進止、寺僧分相同之由、衆徒雖申之、樂人・舞人者、自上拜領之。寺僧等分者、或清衡等之時、寄附之、或前々別當立置之間、寺僧等令相論之時、別當成裁許狀之條、兩方申狀無相違歟。但相傳師跡之時、先例、不取別當符之由、衆徒申之。而兩方、可被問衆徒之由、雖申之、爲寺務之仁、爭不成任符哉。然者、寺僧則可相從別當之成敗。別當又不可致新儀之沙汰矣。次別當、取見參料事、兩方共以雖申子細、所詮、得別當任符時、令沙汰任料否、可被問先例之由、雖申之、沙汰之趣、頗非正義。自今以後、可令停止也矣。

一 顯密兩宗供僧田事

右、如隆覺申者、傳園城寺之法、或顯密共以有供田以下職。或讓他人、或令沽却之後、墮落世間。如此關分之時、被省無縁衆徒者、前例也。而不論宿老・若衆、爲寺家進退被宛行之條、無其謂云々。如榮賢申者、衆徒有訴訟之時、相尋子細、令成敗畢。宗衆徒并慶舜・昌舜・幸俊・長海等申狀、進之云々者、有闕分之時、可被省無縁衆徒之處、無其儀之由、衆徒雖申之、相尋子細、別當令成敗之由、榮賢申之。所詮、可爲別當成敗之由、載先條之上、不及子細矣。（中略）

以前條々、依將軍家仰、下知如件

左馬權頭平朝臣（花押）

相模守平朝臣（花押）

文永元年十月廿五日

この左馬權頭平朝臣・北条時宗と相模守平朝臣・北条政村の發給した「文永元年下知狀」には、第一項の「別當進退條」、第二項の「顯密兩宗條」だけでも、注目すべき事柄が満載されている。その中でも、小稿は次の三点について注意したい。

一つ目は、寺僧側の隆覺が申し述べている中尊寺と毛越寺に存した「樂人・舞人」についてである。隆覺側によると、その数は三六人に及んでいる。これほどの樂人・舞人の所帶に經濟的基盤を、どのように確保していたのだろうか。寺僧側に対する別當側の榮賢はこれにつき「樂人・舞人所帶事、自上令拜領」と応えている。恐らく、幕府・鶴岡八幡宮などから派遣されていたこの樂人・舞人たちの生活費も、「上」すなわち幕府によつて賄われていたのであらう。

このことを思うにつけ、東國中尊寺・毛越寺と鎌倉鶴岡八幡宮との祭祀の一体性の強さを痛感する。

二つ目は、中尊寺・毛越寺の別當補任のありようについてである。この別當補任に関して、隆覺側は「右大將家御時、別當理乘房、致非例之間、依衆徒之訴訟、被改易畢」といい、榮賢側も「右大將家御時、爲沒收之地、被補別當畢。本供僧一向進退之、況於新供僧哉」といつていることから判断して、別當補任権は幕府（將軍）にあった。それゆえ、ここにも幕府と中尊寺・毛越寺との強い政教一如の關係、一歩進めていえば、幕府主導による宗教的祭祀権の現実的行使を確認するのである。こうして補任された別當は、寺僧側が「依衆徒之挙、撰法器之仁」んだ供僧を自らの下知狀によつて決定し、「本供僧一向進退之、況於新供僧」と新旧の別を問わずその供僧たちを指揮する。

供僧任命権を有する別当といえども、頼朝の治世下と同様、「第三項堂塔修理條」に「若貪寺用、不_レ成其功者、可_レ被_レ改_レ補所職也」とある如く、不正を犯せば、幕府により改補されることになっていた。

最後の三つ目は、「第二項顕密両宗條」に関して。

高橋氏は前掲高論の中で、「この文永元年下知状において、もつとも注目すべき事実は、平泉における宗門の帰属を明らかにすると思われる記事があることである。」と明言され、これまで、平泉の所依とする宗法が何であったかを回顧され、次のように吐露された。

「これまで、中尊寺・毛越寺ないし檀主としての藤原氏の宗門が、天台か真言か、そのなかでも山門か寺門か、あるいは、御室か醍醐か、さまたまに推測がなされてきた。結論的には山門系の台密、という考えが多かったにしても、御室や醍醐などの東密に結んで考える人もすくなくなかった。そして、當時は一種の宗教混合（シンクレティズム）の時代であるから、顕密いずれか、東密・台密、ないし山門・寺門、いずれか一つとして考えるのは、あまり意味がないというふうないいかたもあり、筆者なども、どちらかというところ、この最後の説に近い立場であって、平泉の宗門改めをなかなばあきらめていたのである。」

「平泉の宗門改めをなかなばあきらめていた」、氏の前に、本文書第二項の「當時者、傳園城寺之法」の文字が飛び込んだのである。氏は、従前の研究史を顧みながら、平泉の宗派的結論を、「寺門派所依の顕密兼学の寺」と決すに至ったことは言うまでもない。

「右、如隆覺申者、當寺者、伝延曆寺之法」ではなかった。隆覺は確かに「当寺は園城寺の法を伝う」と述べた。東国中尊寺・毛越寺の

抛るべき宗法は寺門派園城寺の教法であったのである。幕政の政教史の中で、頼朝以来、あれほど幕府を反目した山門派延暦寺、あれほど対抗し合った寺門派園城寺と山門派延暦寺。幕府の鶴岡八幡宮の経営が寺門派園城寺と東寺を核とした「真言密教」によって営まれ、幕府の宗教世界そのものが、この真言密教と臨濟禪との総和たる「禪密主義」を基調にしていたことに思いを致すとき、この「當寺者、傳園城寺之法」の九文字の持つ意味は、小稿にとつても頗る大きい。

鎌倉幕府の宗教政策たる「禪密主義」が、ひとつの宗教的祭祀権の現実的な行使として、東国平泉の地に顕現していたことを、『住心院文書』の「當寺者、傳園城寺之法」なる九文字が何よりも雄弁に証明している。

（逗留先の北京友誼賓館にて）

註

（1）黒田俊雄氏『日本中世の国家と宗教』および『日本中世の社会と宗教』（いずれも、岩波書店刊）。「顕密主義」をめぐることは、拙稿「書評 黒田俊雄著『日本中世の社会と宗教』」（『史学雑誌』第一〇二編第四号所収）を参照。

（2）拙著『中世国家の宗教構造』（吉川弘文館） 拙稿「鎌倉幕府の宗教政策とその基調」（佐伯有清先生古稀記念論集『日本古代の祭祀と仏教』所収予定、吉川弘文館）。

（3）拙稿「幕府・異域・宗教―鎌倉時代を中心に―」（『地方史研究協議会編『北方史の新視座』、雄山閣出版）。

(4) 拙稿「中世北辺の仏教」(羽下徳彦編『北日本中世史の研究』吉川弘文館)。

(5) 『津軽一統志』(青森縣叢書第六編)。

(6) 『大日本地名辞書』(奥羽篇、一〇五〇頁)。

(7) 齊藤利男氏「境界の中世都市、大鰐・宿川原」(『図説青森県の歴史』河出書房新社)。

(8) 『種々御振舞御書』(『昭和定本 日蓮聖人遺文』第二卷、九七九～八〇頁)。

(9) 「宇都宮家武條」(『鎌倉遺文』一五〇四四号)。

(10) 前掲(3)の拙稿。

(11) 前掲(2)の拙著および拙稿。

(12) 前掲(1)を参照。

(13) 入間田宣夫氏「中世の松島寺」(『宮城の研究』三所収、清文堂。および前掲(4)拙稿)。

(14) 前掲(8)。

(15) 「三三蔵祈雨事」(『昭和定本 日蓮聖人遺文』第二卷、一〇六六頁)。

(16) 『大日本地名辞書』(奥羽篇)一〇五八頁。

(17) 同右、一〇三〇～三二頁。

(18) 『金ヶ崎町史』、二四七～四八頁。

(19) 『大船渡市史』第五卷、七五～七六頁。

(20) 『鹿角市史』第一卷、六〇一～六〇四頁。

(21) 『国見町史』第一卷、二〇七～二二二頁。

(22) 『若松市史』上巻、一〇〇三頁。

(23) 『十和田市史』下巻、七六七～六八頁。

(24) 『長井市史』第一卷、七五五～五八頁。

(25) 同右、七六〇～六二頁。

(26) 『高島町史』一九八頁。

(27) 『平泉町史』第三卷、六三四～六六一頁。

(著者)・かおる 北海道教育大学教授